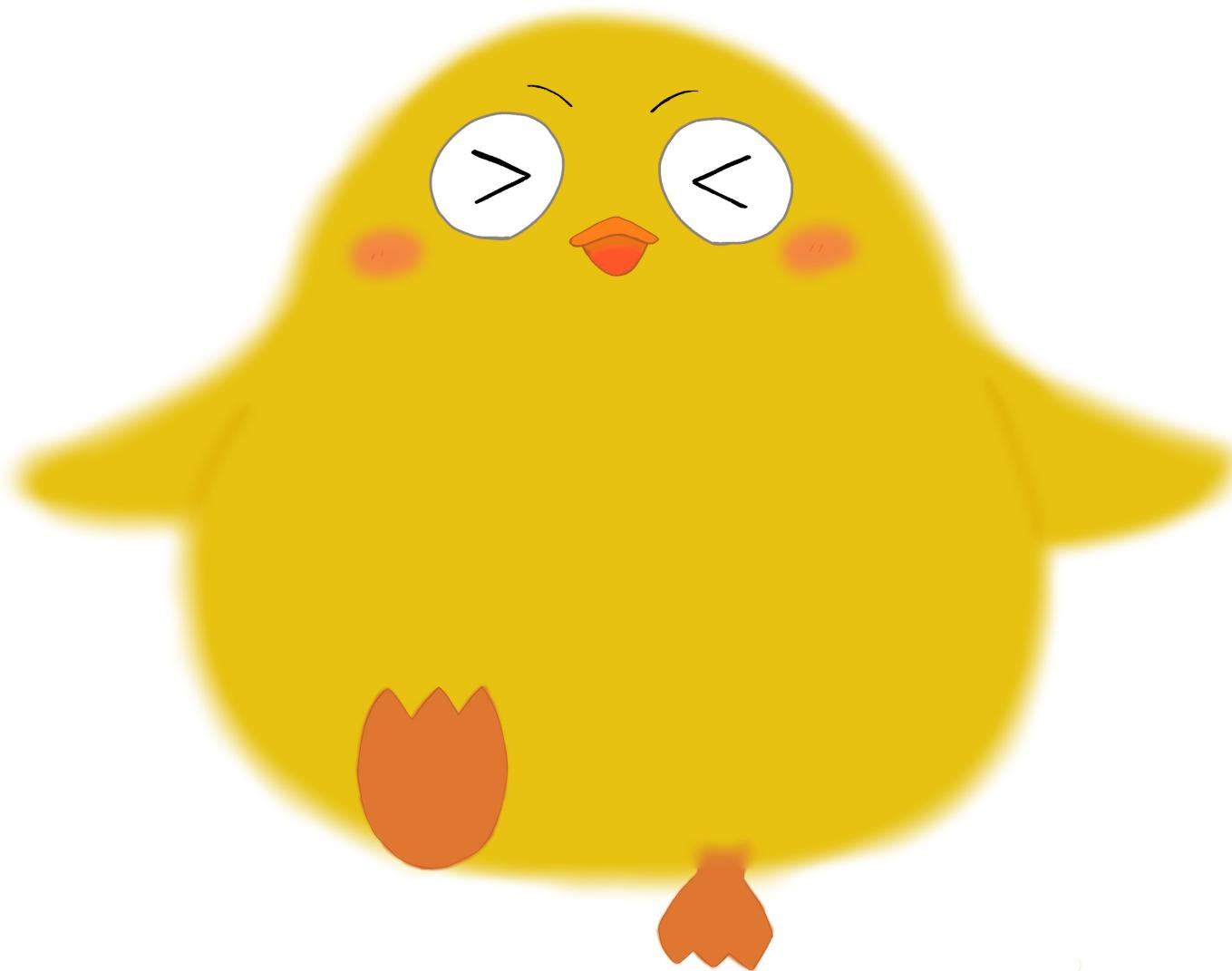


ひよ子くんと  
新しい友達



文、絵・川口 美佳

今日は、ずっと楽しみにしていたお出かけの日です。

ひよ子くんは朝から元気いっぱい。

かけ足で野原に向かいます。

「お父さん、お母さんも早く早くー」

「そんなに急ぐと転ぶわよ！」

「はーい」という返事とは反対に先へ先へと走っていきました。

先に野原に着いたひよ子くんは、お父さんとお母さんが来るのを

待っている間一人で遊んでいました。

すると、目の前に一匹の蝶々が飛んできました。



あまりのきれいさに、ひよ子くんは後を追うようについていきました。

夢中になつて蝶々を追いかけているうちにひよ子くんは

薄暗い森の中に入ることに気が付きました。

周りを見回しても追いかけてきた蝶々や自分が来たはずの道が分かりません。

一人でとぼとぼと歩いていると急に雨が降り出しました。

急いで雨やどりができそうな場所を探し走つていくと

大きな木がありました。大きな木の根元の部分に穴があいていて

雨やどりするにはちょうど良さそうな場所でした。

しかし、どれだけ待つても雨はやみそうにありません。

寂しくなつて泣きだしてしまったひよ子くんの前に

大きめの葉っぱを頭に乗せた茶色のひよ子が通りかかりました。

ひよ子くんがじつと見つめていると、

「こんなところでどうした？ 迷い込んだのか？」と

話しかけてきました。

「うん」と返事をしたひよ子くんを見て、

「そうなのかなー。じゃあ、雨がやむまで一緒にいてあげるよ。

そのかわり、君とたくさん話をしたいんだけどいいかな？」

と茶色のひよ子は言いました。

ひよ子くんは嬉しそうに笑い、

「もちろん！ 僕も君の色んな話が聞きたいやー」と答えました。

それから二匹のひよ子は雨がやむまで沢山話をしました。

気がつくといつの間にか雨はやみ、木々のすき間から陽が差し込んでいました。

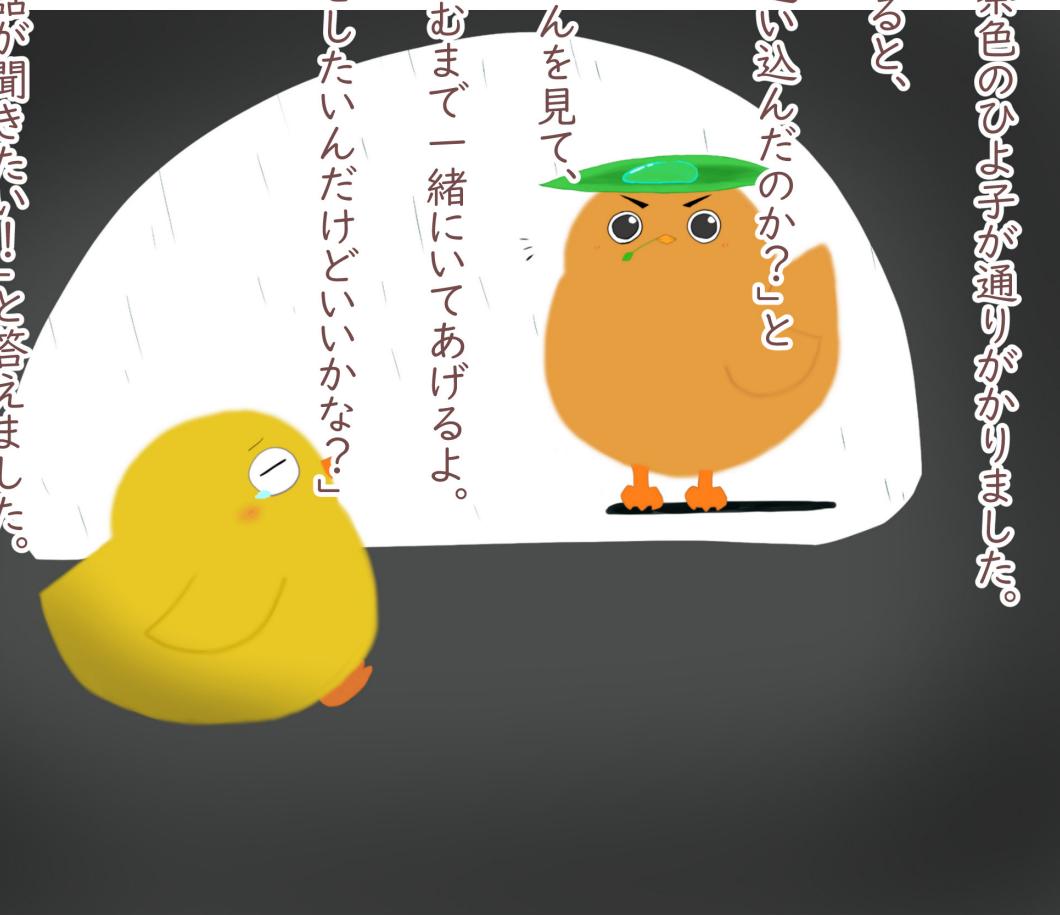
「雨はすっかりやんてしまったな。」

「さあ、ひよ子くん帰ろう、森の出口まで連れて行ってあげるよ。」と

茶色のひよ子は言い立ち上がったので、

ひよ子くんも後ろをついていくように歩き出しました。

森の出口が近づくにつれ、遠くからひよ子くんを呼ぶ声が聞こえてきました。



「あつー！お父さんとおかあさんだ！」と元気な声でひよ子くんが言うと、「もう大丈夫だな。また迷い込まないよう気に付けて帰るんだぞ」

「うん、ありがとう！今度から気をつけるけど、また遊びにきてもいい？」  
「ああ、いいよ。いつでも待ってるよ。今度は森の入り口で会おうな。」

「うん、またね！」

そう言って2匹は別れました。

ひよ子くんが手を振ろうと森のほうを振り返ると、

森の上には大きな虹がかかっていました。

